

ローマ、ビジョンを打ち立てる - ナンバー・イレブン

預言の三重適用を理解する：2001年9月11日とラオデキア的アドベンチズム
に対する最終試練の過程

Jeff Pippenger
2024-08-30

1840年8月11日がミラーの採用した規則を確証したのと同様に、2001年9月11日以後、見ようとする者には、フューチャー・フォー・アメリカが採用した預言的原則こそが、イザヤ書二十八章に示されている後の雨の真の聖書的な方法論であることが明らかになった。聖史に示されているとおりの「改革の線に改革の線を重ねる」という適用によって、2001年9月11日が1840年8月11日の繰り返しであることが確証された。

彼らは、黙示録10章の力ある御使いが1840年に降臨したとき、それが2001年の降臨を予表しているのを見た。イスラムに関する預言が成就したとき、双方の御使いが降臨した。その後、その運動は、男女がその方法の有効性に応答するにつれて成長した。ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチストの指導部は、1989年の終わりの時に退けられ、今やその教会は最終的な試練の過程に入り、主は第三天使の運動を終わりの時の代弁者として選び始めた。

終わりの時のために与えられた諸規則のうち、最重要のものは預言の三重適用であった。とりわけ当時は、三つのわざわいの三重適用がそれに当たり、それは2001年9月11日の出来事をきわめて明確に裏づけた。その真理が誠実に調査されたとき、真理を求める心によってエレミヤの「古き道」へと導かれていた人々の間で、預言の成就と、第三天使の運動が採用した預言解釈の規則の妥当性が確認された。

黙示録9章における第一の災いの歴史はイスラムを表している、という初期の先駆者たちの正しい理解があると見なされた。偽預言者ムハンマドは、その歴史における王であるとされた。その歴史においてイスラムはローマ帝国を攻撃し、その戦法は、突然かつ不意に打撃を与えるものだと特定された。その点で、イスラムの戦法そのものが「アサシン」という語の語源となったと理解された。その歴史においてイスラムはローマの軍勢に害を加え、この時代は150年の時の預言に従って終結した。その時の預言が1449年7月27日に終わると、第二の災いの時の預言と歴史が始まった。

そこで、391年と15日から成る別の時の預言が始まり、それは1840年8月11日に終わった。その歴史において、イスラムの預言的な働きを代表した支配者はオットマンであり、第一の災いの歴史ではムハンマドがその型を示していた。第9章は、第二の災いの歴史において、イスラムがローマの軍勢を滅ぼすことになる」と述べている。彼らは依然として、不意に突然襲うという戦法を用いたが、その時代には火薬が初めて発明され、使用された。したがって、第二の災いは、暗殺者の不意打ちという戦法に加え、爆発物をも含む戦い方を表していた。

2001年9月11日、イスラムの第三の災いが爆弾によってローマの靈的な軍勢を突如として打ち据えた。この出来事はいくつかの預言的真理の筋道の始まりを画したが、それは第一と第二の災いという先行する二つの証しの上に明確に確立されていた。その出来事は、1840年8月11日に第二の災いに関するイスラムの預言が成就し、黙示録10章の天使が降りて来てミラライトの歴史が力づけられたのと同様に、第三の災いに関するイスラムの預言が到来したとき、その日が黙示録18章の天使の降臨を示す印となったことを明確に示した。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ていますか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」 Review and Herald、1906年7月5日。

フューチャー・フォー・アメリカの運動は、見ようとする者には、ミレライト運動に対応するものと見なされた。その時点以降、第三の災いに関するイスラムはメッセージの主要要素となった。靈感ははっきりと、黙示録の天使が降臨するときに後の雨が到来することを教えた。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

ユダ族の獅子が後の雨についてのより広範な理解を開き始められたとき、彼は御自分の民を、後の雨の主要な参照箇所であるヨエル書へと導かれた。その時点で、2001年9月11日以降にその運動に加わった者たちのうちの何人かは、真夜中の叫びの覚醒へと至る過程で神のぶどうの木を滅ぼすヨエル書の虫たちはイスラムを象徴しているのだと断定した。彼らは、その虫たちがローマを表していることを、見ることができず、また見ようとしなかった。

三つのわざわいに関する預言の三重適用を認識することによってもたらされた力強い光は、昆虫がイスラムを象徴しているという彼らの主張に、聖別されていない論理的裏付けを与えた。いつもそうであるように、ひとたび私的解釈が容認されると、誤った前提を成り立たせようとして聖書が曲解されることになる。自説を擁護する取り組みの中で、彼らは型と反型の原則を理解していないことを示した。

神学や聖書学においては、一方が他方を予表する二つの要素の関係を説明するために、「型」と「反型」という用語が用いられる。この概念は、より広い範疇では「影」と「実体」に分類されることが多い。

型とは、旧約聖書において、新約聖書の対応する出来事・人物・制度を前もって指し示し、予表する出来事・人物・制度である。これは象徴的な先行形として機能する。対型とは、型の成就、すなわちその実現である。それは、型によって予表されていた実体である。「影」と「本体」という概念は、型と対型の関係に並行する。「影」は（型）を表し、「本体」は（対型）を表す。

だから、食べ物や飲み物のこと、祭りや新月、安息日について、だれにもあなたがたを裁かせてはなりません。これらは来るべきものの影にすぎず、本体はキリストにあります。コロサイの信徒への手紙 2:16-17

というのは、律法は、やがて来る良いものの影にすぎず、そのものの実体ではないので、彼らが年ごとに絶えずささげるあのいけにえによって、そこに近づく者たちを完全にすることは決してできないからである。ヘブライ人への手紙 10:1

2001年9月11日以降に、ヨエル書と、四匹の昆虫によって象徴される教皇ローマの正しい同定（それはラオデキヤ的アドベンティズムの漸進的破壊を描き出す）をめぐって起こった論争において、その昆虫はイスラムを表すと主張する者たちは、三つの災いの三重適用を不当に強調しただけでなく、ローマの反型を指し示す型をも引き合いに出し、それらの型が実際にはイスラムを指し示しているのだと主張した。こうすることで彼らは、型と反型の原理を真に理解していないか、あるいは目的のためなら型を歪曲することも正当な手段だと考えていたかのいずれかであることの証拠を示した。

ローマをめぐる現在の論争において、ダニエル書十一章十四節の「略奪者」をアメリカ合衆国だとする誤った考えに固執する人々が、予言の三重適用と型と反型の原則の双方を正しく理解していないことを示す証拠が、再び示されている。

「略奪者」はアメリカ合衆国であるとする見解を持つ人々がその立場を擁護しようとする時、彼らは三つのローマに関する三重適用の手法を適用して、近代のローマ、すなわちローマの第三の顕現がアメリカ合衆国であることを証明しようとする。彼らが故意に偽証しているのではなく、予言の三重適用の規則についての盲目的な無知を示しているにすぎないと信じるなら、彼らは最初の二つのローマの預言的特性を用い、ローマ史のある特性が近代のローマを特定すると主張する。

異教ローマは、ローマに関する三つの預言的成就のうち第一である。ダニエル書第8章では、異教ローマは男性形の「小さな角」である。ダニエル書第2章では、異教ローマは国家権力である。ダニエル書第7章では、異教ローマは十の王国に分裂する。

ローマの第二の現れは教皇ローマであり、それは第八章では女性の小さな角、第二章では教会政治、そして第七章では冒瀆を語り三つの角を引き抜く角である。異教ローマは単一の権力であるが、教皇ローマは二重の権力であり、教皇制の教会が、異教ローマの旧来の政治構造の国政を支配していることを表している。1798年に、教皇権は致命的な傷を受けたが、教会であることをやめたのではなく、それまで支配していた世俗権力が取り去られたため、聖書の預言における獣であることをやめただけであった。

第二のローマとは教皇ローマのことであり、それが聖書の預言における権力（「獣」）として機能したのは、国家権力を統制してその冒瀆的な計画を遂行する能力を持っている

たときに限られていた。第一のローマは単一の権力であり、第二のローマは二重の権力、そして第三のローマは三重の権力である。ローマの三つの現れは、あらゆる預言の三重適用に共通する原則に従っている。預言的には、三つのわざわい、三つのバビロン、三つのローマ、そして三人のエリヤがある。型と反型の観点から言えば、いずれの三重適用においても、最初の二つの現れは第三の成就の影を示す「型」であり、その第三の成就こそが「反型」であって、預言の三重適用の実体である。

ローマについては、最初の二つのローマの特徴として、異教ローマと教皇ローマの双方が、その支配者にPontifex Maximusの称号を与えていたことが挙げられる。したがって、現代のローマの支配者の称号もPontifex Maximusであり、これはアメリカ合衆国のいかなる大統領にも与えられたことのない称号である。最初の二つのローマは、それぞれの歴史的時期において王権を確立するために三つの地理的障害を克服した。1798年に至るまでの過程で、アメリカ合衆国が三つの地理的障害を克服したという証拠はない。

最初の二つのローマには、至高の支配を行う特定の期間が示されていた。ダニエル書11章24節では、異教ローマが「一時」、すなわち三百六十年のあいだ支配するとされており、それは紀元前31年のアクティウムの海戦から西暦330年までである。教皇ローマは、三本の角が取り除かれた後、538年から1798年までの千二百六十年間支配すると繰り返し特定されている。イザヤ書23章では、アメリカ合衆国が一人の王の日々のように象徴的な七十年間君臨するとされているが、その象徴的な七十年の支配に先立って三つの地理的障害を取り除いたことはない。

現代のローマは、ダニエル書11章40～42節において、南の王、栄光の地、エジプトという三つの地理的障害を克服するものとして描かれており、これら三つの障害が打ち負かされてローマの支配に服すると、龍と獣と偽預言者から成る三重の連合を形成する。ヨハネはまた、教皇的な獣の致命的な傷が癒され、その後に象徴的な四十二か月のあいだ支配することも伝えている。

また私は、その獣の頭の一つが死に至る傷を負ったかのように見た。しかし、その致命的な傷は癒え、全世界の人々は獣に驚嘆して従った。彼らは、獣に権威を与えた竜を拝み、また獣をも拝んで言った。「誰がこの獣に比べられよう。誰がこれと戦うことができようか。」また彼には、大言と冒瀆を語る口が与えられ、さらに四十二か月の間活動する権威が与えられた。黙示録 13:3-5

致命的な傷が癒えた後に象徴的な四十二か月間支配する獣は、ローマの勢力である。

黙示録13章の預言は、小羊のような角を持つ獣によって表される権力が、「地とそこに住む者たち」に、そこでは「豹のような」獣で象徴されている教皇権を崇拜させる、と宣言している。……旧世界と新世界の双方において、ローマ教会の権威のみに基づく日曜制度が尊ばれることを通して、教皇権は崇敬を受けるであろう。『大争闘』578頁

第一のローマである異教ローマは、ダニエル書11章24節の成就として三百六十年にわたり覇権を握った。そしてそれは、ダニエル書8章9節の成就として三つの地理的障害を取り除いた後のことであった。

教皇ローマ、すなわち第二のローマは、聖書のいくつかの箇所成就として、千二百六十年間、最高権威として支配した。そしてそれは、ダニエル書7章8節と20節の成就として、三つの地理的障害を取り除いた後に行われた。

ダニエル書11章40節で、現代のローマは南の王に打ち勝ち、41節では麗しの地を征服し、42節ではエジプトを征服する。現代のローマは、ダニエル書11章の北の王である。

第一のローマである異教ローマは迫害を行う権力であり、第二のローマである教皇制ローマも迫害を行う権力であった。したがって、現代のローマも迫害を行う権力となるだろう。

アメリカ合衆国は、現代のローマによって行われる第三の迫害に加担することになる。しかし、これはアメリカ合衆国を教皇権と同一視するものではなく、単に、終末の時代におけるアメリカ合衆国と教皇権の関係の一つの特徴を示しているにすぎない。

終わりの時においてアメリカ合衆国が「あなたの民の略奪者たち」であると主張しようとする者たちは、「三つのローマ」の三重適用を用いて、アメリカ合衆国を誤って特定している。彼らが三重適用の文脈で用いる欠陥のある方法は、最初の二つのローマの特質を特定し、第三のローマはローマそのものではなく、ローマの預言的特質であると主張することに基いている。

彼らは、西暦321年のコンスタンティヌスによる最初の歴史的な日曜令と、西暦538年の教皇ローマによる日曜令を挙げ、間もなく米国で制定される日曜令が米国を現代のローマと規定するものだと主張する。さらに、ダニエルが語った「荒らす憎むべきもの」を見たなら逃げよというイエスの警告を日曜令のことだと同一視するという誤った適用まで加えて、論を混同している。イエスが語られた「荒らす憎むべきもの」は、終わりの時の二つの日曜令を指し示しているが、それは獣の刻印を避けよという警告ではなく逃げよという警告であるという点で、まったく異なる象徴である。彼らの誤った考えは、終わりの時に二つの具体的な日曜令があるという事実すら触れていない。

それゆえ、預言者ダニエルによって語られた荒廃をもたらす忌むべきものが聖なる場所に立つのを見たなら（読む者は悟れ）、そのときユダヤにいる者たちは山へ逃げよ。屋上にいる者は、家の中から何かを取り出そうとして下に降りてはならない。畑にいる者も、衣服を取りに戻ってはならない。その日には、身重の女と乳飲み子に乳を飲ませている女はわざわざいである。ただし、あなたがたの逃れることが冬や安息日にならないよう祈れ。マタイによる福音書 24:15-20。

「預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべき者』」は、イエスをご自分の民にお与えになったしるしであり、異教ローマがエルサレムを包囲し、その後、紀元66年から70年にかけて聖所と都を破壊したときに起こるエルサレムの滅びから、彼らがいつ逃れるべきかを示すものであった。

イエスは、聞いていた弟子たちに、背教したイスラエルに下る裁き、特にメシアを退けて十字架につけたことに対する応報の復讐について宣言された。紛れもないしるしが、その恐るべき頂点に先立って現れるだろう。恐れられた時は、突然かつ迅速にやって来るだろう。そして救い主はご自分に従う者たちに警告された。「それゆえ、預言

者ダニエルによって語られた『荒廃をもたらす忌むべきもの』が聖なる場所に立つのを見たなら（読む者は悟れ）、そのときユダヤにいる者は山々へ逃げよ。」マタイ24:15, 16; ルカ21:20, 21. 偶像崇拝的なローマの旗印が、城壁の外にいくらか広がっていた聖域に掲げられるとき、キリストの弟子たちは逃亡によって安全を見いだすべきであった。その警告のしるしが見えたなら、逃れようとする者は少しも遅れてはならない……

「エルサレムが滅ぼされたとき、キリスト者は一人も命を落とさなかった。キリストは弟子たちに前もって警告しておられ、その言葉を信じた者は皆、約束されたしるしを注視していた。……彼らはためらうことなく、ヨルダン川の向こう、ペレアの地にある安全な場所であるペラの町へと逃れた。」『大いなる論争』25、30.

538年が近づくにつれ、その時代のキリスト教徒たちは、異教の宗教との妥協によって教会が墮落していることを認識し、キリストの警告に基づき、さらに『テサロニケ人への第二の手紙』2章における使徒パウロの証言によって与えられた光と相まって、千二百六十年の預言的な荒野へと逃れた。

しかし、キリストの来臨に先立って、予言されていた宗教界の重要な出来事が起こることになっていた。使徒はこう宣言した。「すぐに心を動揺させたり、うろたえたりしてはならない。霊によってであれ、言葉によってであれ、あるいは私たちからのものとされた手紙によってであれ、キリストの日が差し迫っているかのようにしてはならない。どのような手段によっても、だれにも欺かれてはならない。その日が来るのは、まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければならないからである。彼は、神と呼ばれるすべてのもの、また拝まれるものに反抗し、それらすべての上自らを高く掲げ、ついには神の宮に神のように座して、自分を神であると示すのである。」

パウロの言葉は誤解されてはならなかった。彼が特別な啓示によって、キリストの差し迫った来臨をテサロニケ人に警告したのだと教えるべきではなかった。そのような立場は信仰の混乱を招く。というのも、失望はしばしば不信に導くからである。ゆえに使徒は、兄弟たちに対し、その種の知らせを自分から出たものとして受け取らないようにと戒め、さらに、預言者ダニエルによってきわめて明確に描写されている教皇権が、やがて台頭して神の民に戦いを挑むことになるという事実を強調した。この権力がその致命的で冒瀆的な働きを遂げるまでは、教会が主の来臨を待ち望むのはむなしなことであった。「覚えていないのか」とパウロは尋ねた。「私がまだあなたがたと共にいたとき、これらのことを話したではないか。」

真の教会を襲うことになる試練は、恐るべきものであった。使徒が記していたその時でさえ、「不法の秘密」はすでに働き始めていた。将来起こるはずの出来事は、『サタンの働きに従い、あらゆる力としるしと偽りの不思議を伴い、また滅びる者たちの中にある不義のあらゆる欺き』によってもたらされることになっていた。

「『真理への愛』を受け入れることを拒む者たちについての使徒のことばは、とりわけ厳粛である。『このゆえに、』と彼は、真理のメッセージを故意に退けるすべての者について宣言した。『神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。すなわち、真理を信じないで不義を喜んだ者たちが皆、さばきに定められるた

めである。』人は、神があわれみによって彼らに送られる警告を、罰せられることなく退けることはできない。これらの警告に背を向け続ける者たちから、神は御霊を取り去り、彼らの好む欺きに彼らを委ねられる。Acts of the Apostles, 265, 266。」

異教と教会との妥協は、当時のキリスト者たちを教皇ローマから分離させるよう導いた警告のしるしであった。しかし、逃げよとのイエスの警告にパウロが光を添えたその箇所は、ウィリアム・ミラーが『ダニエル書の“the daily”』が異教ローマを表しているとして理解するに至ったのと同じ箇所であることに注意すべきである。異教ローマが抑えとなり、次いで退いて、教皇ローマが王座に就くために道を開けるといふ預言的な関係は、必ず理解されねばならない真理であった。というのも、その預言的關係を認識しないことの帰結は、その真理を愛さなかった者たちに強い感わしをもたらすからである。ホワイト姉妹は同じ歴史を扱っている：

忠実であろうとする者たちが、司祭服に身を隠して教会に持ち込まれた欺瞞と忌まわしいものに対して揺るがずに踏みとどまるには、必死の闘いを要した。聖書は信仰の規範として受け入れられなかった。宗教の自由の教義は異端と呼ばれ、その擁護者たちは憎まれ、弾圧された。

長く厳しい闘争の末、忠実な少数者は、背教した教会がなおも虚偽と偶像崇拜から自らを解き放つことを拒むなら、その教会とのいかなる結びつきも断つことを決意した。彼らは、神の言葉に従おうとするなら、分離が絶対的な必要であることを悟った。自らの魂を滅ぼすような誤りを容認することも、子らや孫たちの信仰を危うくするような前例を作ることも、彼らはあえてしなかった。平和と一致を確保するために、彼らは神への忠実さと両立するあらゆる譲歩をする用意があった。しかし、原則を犠牲にして得られる平和は、あまりにも高くつくと感じた。もし一致が真理と義の妥協によってしか得られないのなら、それならば不一致があつてよい、戦争でさえあつてよい。『大いなる論争』45、46。

終末時代におけるアメリカ合衆国と教皇権の預言的關係は、紀元538年に至るまでの異教ローマと教皇ローマの關係に関するパウロの指摘によって、予型として示され、強調されている。ローマに関する三重の適用において、異教ローマは「荒らす憎むべきもの」を逃げるべきしるしとして指し示したイエスの言葉を成就し、教皇ローマもまたイエスの言葉を成就した。ホワイト夫人は、キリストの言葉の別の成就を指摘している。

今は、神の民がこの世に心を向けたり、この世に宝を蓄えたりしている時ではない。初期の弟子たちのように、荒れ果てた人里離れた場所に避け所を求めざるを得なくなる時は、そう遠くない。ローマ軍によるエルサレム包囲がユダヤ地方のキリスト者たちにとって退避の合図であったように、教皇の安息日を強制する布告において、わたしたちの国が権力を行使することが、わたしたちへの警告となるだろう。その時こそ大都市を離れる時であり、それは、のちに小さな町々も離れて、山中の人里離れた場所にある隠れ住む家へ移るための準備となる。『証言』第5巻、464ページ。

キリストの時代のキリスト教徒にとって、その警告はエルサレムからいつ逃れるべきかを示していた。5～6世紀には、その警告によりキリスト教徒たちは荒野へと逃れた。

そして女は荒野へ逃げた。そこには神によって備えられた場所があり、彼らがそこで彼女を千二百六十日の間養うことになっていた。……また女には大鷲の二つの翼が与えられ、彼女は蛇の前から逃れるために、自分の場所である荒野へ飛んで行き、そこで一時と二時と半時のあいだ養われた。すると蛇は女を押し流そうとして、その口から彼女の後に洪水のような水を吐き出した。だが地は女を助け、地は口を開いて、竜がその口から吐き出した洪水を飲み込んだ。そこで竜は女に激しく怒り、神の戒めを守り、イエス・キリストの証を持つ彼女の子孫の残りの者たちと戦おうとして出て行った。ヨハネの黙示録12章6節、15～17節

イエスはアルファでありオメガであるから、物事の終わりをその始まりによっていつも示す。教皇ローマの歴史における「荒らす憎むべき者」の警告は、教皇権が聖なる所に立っていると見なされたとき、それを指すものとして認識された。

この警告はマタイ、マルコ、ルカによって記録されており、各箇所言い回しが少しずつ異なる。マタイは「それゆえ、預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべきもの』が聖なる所に立つのをあなたがたが見るときは」と記し、マルコは「あなたがたが、預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべきもの』が、あるべきでない所に立っているのを見るときは」と記している。ルカは「あなたがたが、エルサレムが軍勢に囲まれているのを見るときは、その荒廃が近いことを知りなさい。そのとき、ユダヤにいる者たちは山へ逃げよ」と記している。

三つの証言はともに適用される。より具体的な適用として、ルカがエルサレムが軍勢に取り囲まれると述べている箇所は、西暦66年に異教ローマがエルサレムへの包囲を開始したとき、なおエルサレムにいたキリスト者は直ちに退避すべきだという警告を指し示している。マタイが言う『聖なる場所』は、パウロが『神の神殿に座して、自分は神であると示す』と述べる『不法の人』の指摘と対応しており、したがってそれは『荒らす憎むべきもの』の教皇制による成就を表している。マルコは、立ってはならない所に『荒らす憎むべきもの』が立つことを示しており、それは終わりの時代にアドベンティズムに与えられた退避の警告に対応している。これらの警告のうち二つは、『読む者は悟れ』という命令と結びついており、いずれも、その時代のキリスト者に退避を知らせるしるしを扱っている。

『あなたの民を略奪する者』はアメリカ合衆国だと主張する人々によって歪められている。「三重適用」の誤用は、アメリカ合衆国における日曜法において『荒廃の忌むべきもの』が成就するとき、そのとき施行される日曜法がアメリカ合衆国を現代のローマと特定することを示している。というのも、異教ローマと教皇ローマはいずれも、かつて日曜法を施行していたからである。

その誤った適用の問題点は、異教ローマの日曜令は西暦321年に施行されたのに対し、異教ローマによる「荒らす憎むべきもの」の成就是西暦66年、すなわち321年の日曜令より255年前に起きているという点である。同様に、「不法の人」を生み出した妥協は、パウロが「不法の秘密はすでに働いている」と言った彼の時代にはすでに起こっていたが、教皇制による日曜令が現れるのはその四世紀以上後であった。予言の三重適用における最初の二つの証しが、終わりの時における第三の成就の特徴を定める。終わりの時における「荒らす憎むべきもの」は、二つの歴史的証しとキリストの言葉に関する聖書の三つの

記録に照らすと、日曜令の施行ではなく、逃げるべきだという警告を表している。

次の記事では、預言の三重適用に関連する確立された規則の観点から、その適用に欠陥がある理由を検証し、また、キリストの与えた警告の文脈で日曜法を特定することが預言史の歪曲である理由を明らかにします。

「異教とキリスト教とのこの妥協は、神に逆らい、神よりも自らを高く掲げる者として預言において前もって告げられている『罪の人』の出現をもたらした。その巨大な偽りの宗教体系は、サタンの力の傑作であり、彼が自分の意のままに地を支配するために自らを王座に据えようとする努力の記念碑である。」The Great Controversy, 50.